



今回は、『未来創造 I』1年生職業別ガイダンスの報告です。8つの会場に分かれて、8人の先生方に授業をしていただきました。

◇ A会場 後藤忠雄先生（県北西部地域医療センター長）の講義です！

日時：平成30年2月8日（火）6・7限

参加者：生徒63名

講師：県北西部地域医療センター長 後藤忠雄氏

後藤先生は自治医科大学のご出身。自治医科大学は旧自治省、文部省、厚生省等が設置し、各都道府県の出資により運営されています。（授業料は無償！）各都道府県からの定員は2人ないし3人。地域医療の専門家を育て、医療過疎地域等の医療を担う人財を育てる大学です。

現代の医療の進歩とともに、簡単でない人間の体に対し特異的分化が進む医療。しかし、大部分の健康問題に対応できる「総合診療医」「地域の健康・福祉を考えて実践する医師」が必要です。

後藤先生は、この岐阜の地で、まさに医療と住民・行政をつなぎ、家族のケアも視野に入れた、地域を基盤とした医療体制づくりに尽力されています。医療過疎地域のネットワークを作り、地域の人々、多方面のスタッフとともに複数の診療所を複数の医師で支え合う、こうしたネットワークは、全国でもこの地域だけということでした。

都会から離れたこの地で、患者その人らしい人生を支えるために尽力される先生の姿を目の当たりにし、医療の方面に進路希望を持つ生徒たちは、より自分の価値を広げる選択を考えていく貴重な体験ができたと思います。

【生徒の感想】

○ドラマやテレビで観るような医者イメージががらりと変わりました。過疎化が進むべき地での医療、地域での医療もすごく大切だということが分かりました。

○“地域”に寄り添った後藤先生の話は現実的だったし、近年の医療についての話と対比させて聞くことができたのでとても良かった。「治す」以外の仕事も調べてみたいと思った。

○へき地医療について興味を持ちました。中濃地区は岐阜県の中でも医師の数が足りないということも、地元であるだけに気になりました。

○医療は自分から遠いものと考えていたけど、後藤先生



のように、地域に身近であろうとしてくれる方がいて、私も幅広い価値観で物事を見ていきたいと思った。

○自治医科大学についてもっと詳しく知りたと思いました。初めて聞いた大学でしたが、とてもよさそうだと思います。

○自分の興味ある分野の話聞いて良かったし、自分が考えているのとはちょっと違うところにも関心を広げられたから良かった。



◇ B会場 世古英弘先生（JICA岐阜県デスク国際協力推進員）の講義です！

日時：平成30年2月8日（木）6・7限

参加者：生徒46名

講師：JICA 岐阜県デスク国際協力推進員 世古英弘氏

世古先生は、大学卒業後、海外国際協力隊に参加し、トンガ王国で2カ年、現地の大きな課題である災害対策を中心に活動されました。その後、オランダのライデン大学大学院に留学し、国際公法を修められ、現在、JICA 岐阜県デスクとして活躍されています。

今回のガイダンスでは、国際協力とは？、自らの国際協力の道、国際協力の道を歩む人へのアドバイスと順を追って、丁寧に説明くださいました。ODA（政府開発援助）で日本はなぜ3兆円もの大金を支出するのか？では、日本が戦後の復興で他国の援助を受けていたことを知り、生徒たちには意外の事実だったようで、驚きが見えました。また、現在は、「将来、国際機関で働きたい」という夢の実現に向けての一つの段階であり、まだまだこれからキャリアアップをして夢を実現したい、働く意味は人によってそれぞれだが、自分にとってのそれは「自己実現」であると、熱く語ってくださいました。生徒たちは、国際協力の在り方や働く意味について、考えるきっかけをもらったようです。



【生徒の感想】

世古先生のお話を聞いて、国際協力に興味があった。発展途上国で働くのも興味深く感じた。

発展途上国であっても飢餓だけでなく、肥満が問題になるところに驚いた。国によって問題もさまざまであり、また、伝統文化、食文化などやはりさまざまで、海外で国際協力に従事するのも面白そうだった。そのときは「日本の価値観を押しつけない」という先生の言葉を心に刻みたい。

【生徒の感想】

自らの夢を、人生の中でたくさんの経験を積んで叶えようとしているのがすごい。違う文化に触れて、食文化などに挑戦するのが、またすごかったです。貴重な経験を自分も持ちたいと思いました。

トンガ王国での海外青年協力隊の活動を聞いて、世界にはどんな発展途上国があるのか、どんな協力を必要としているのか、調べてみたいと思いました。また、今後「自己実現」について考えていきたいです。



◇ C会場 今村 薫先生（名古屋学院大学現代社会学部教授）の講義です！

日時：平成30年2月8日（木）6・7限

参加者：生徒67名

講師：名古屋学院大学現代社会学部教授（文化人類学） 今村 薫氏

今村先生は文化人類学の先生で、京都大学大学院理学研究科博士課程修了（理学博士）後、現

在は名古屋学院大学現代社会科学部教授です。子供の頃から正義感と好奇心が強く、サル、の調査、古人骨（縄文人、弥生人）の発掘を経て、アフリカの狩猟採集民サン（ブッシュマン）、サハラ砂漠にすむラクダ遊牧民トゥアレグ、中央アジアの草原に暮らすカザフの自然利用、社会、文化などを研究されています。

今回のガイダンスでは、大学教員としての仕事の内容や、研究者としての研究の進め方について、自分の例を挙げながら細かく説明していただきました。

研究とは何か。その具体的な進め方の方法などを自分の研究例を参考に話していただきました。研究とは、自分が知りたいと思うことの追及であり、俯瞰して客観的に内容を説明できることが重要であること。又その成果を発信していかなければならないことなど、課題研究をするうえで大変参考になる事柄でした。又大学の教員になるための方法や、学生を教えることと、研究、家庭などとの関係など、大学教員を目指す人にとっては大変為になる話を、お聞きすることができました。



【生徒の感想】

- ・大学の教員が何をやっているか、どうすればなれるのかがよく理解できた。
- ・研究をするには理系であっても英語力が必須だと分かったので英語をしっかりと学びたいと思った。
- ・研究者になるのは大変だけど、自分の知りたいことをとことん掘り下げていけることが魅力的だと思った。
- ・研究の際のエピソードや様々な写真、細部まで着目した点などを説明していただき、思わず聞き入ってしまって楽しかった。
- ・大学教員は学生に講義をするだけでなく、自身の専攻分野の研究、発信。大学の運営など多忙な職だとわかりました。私も将来の職業の選択として考えているので、是非とも参考にしたいです。
- ・アフリカの民族の生活など、テレビでみたりして興味があったので面白かった。
- ・研究などの為に長い間、御主人や家族との別居生活があり大変だと思った。

◇ D会場 田中ちぐさ先生（日本モンキーセンター附属動物園）の講義です！

日時：平成30年2月8日（木）6・7限

参加者：生徒 49名

講師：日本モンキーセンター附属動物園 飼育主任 田中ちぐさ氏

田中先生は、愛知県北名古屋市生まれ。幼い頃から動物や自然に囲まれた生活に憧れ、動物に関わる仕事に就きたいという思いから、帯広畜産大学に入学。大学では、家畜や野生動物について学び、キリンの行動について研究を行ったそうです。2010年に帯広市で学芸員として就職し、おびひろ動物園で勤務。その後、大学時代より毎年参加していた研究会で、現在の日本モンキーセンターの園長に声をかけられ、転職されました。現在は主に、キツネザルの飼育管理をおこなっているそうです。

将来の夢がまだ決まっていない生徒たちに対して、将来の夢を答えられることよりも、その仕

事に就いて何をしたいか答えられることの方が重要だと教えてくださいました。将来の夢が決まっていない生徒はもちろん、決まっている生徒たちも、その視点は欠けていたようで、考え直す契機となりました。

【生徒の感想】

動物には何が正しくて何が間違っているか聞けず、答えを自分で考えなければいけない難しさと大切さがわかりました。

やりたいことや好きなことを仕事にしていることについて、とても憧れを感じたので、私も自分の好きな仕事に就いて、その先なにをしたいかまで考えて夢をもちたいです。



【生徒の感想】

どの仕事においても、知識、コミュニケーション力、経験、得意を増やす、根気、ゴールを自分で決めないことが大切だと分かったので、これらのことを意識して生活していきたいです。



【生徒の感想】

夢は何度でも決められるし、仕事は楽しんでやりがいを持つことが大事だと思いました。

この仕事をしたい！と思ったことはあるけど、この仕事に就職して、その後どうしたいかまでは考えたことがなかったので、そういう視点をもって、これから考えていきたいと思いました。

◇ E会場 仲山隼人先生（シナラシステムズジャパン株式会社）の講義です！

日 時： 平成30年2月8日（木）6・7限

参加者： 生徒143名

講 師： シナラシステムズジャパン株式会社 アカウント・エグゼクティブ 仲山隼人氏

仲山先生は学生時代の半分を海外で過ごして来ました。そして新卒でベネッセコーポレーションに入社した後、たったの1年9か月で転職して外資系の中小企業であるシナラシステムズジャパンに入社しました。良くも悪くも波乱万丈な人生を歩んできた中で、先生が学んだ楽しく生きるためのヒントを話していただきました。

イギリスでの小学校時代、日本の小学校への転校、平和な中学時代、台湾で過ごすことになった高校時代、自ら選択したオーストラリアでの大学時代という時系列で、その時その時の経験を鮮明に語っていただきました。また就職から転職までの気持ちの変化や日系企業と外資系企業の違いについても明快に語っていただきました。その中で先生が考えるよりよく生きるヒントについて、わかりやすく話していただきました。

【生徒の感想】

- ・自分の行動に責任をもつようにしたいと強く思いました。
- ・大きな企業に勤めていたのに、自分がやりたいことを優先し、思い切って転職し、やりがいを感じていらっしゃるのがとても理想的な生き方だと思いました。
- ・営業は単なる商品の売り込みではなく、お客さんの問題点を明確にしていくプロセスであることがわかりました。
- ・必要とされる力（内省的マインド、目的と動機、コミュニケーション能力、行動力、専門性）について具体的によく理解できました。このような力を身につけられるように普段から意識して生活したい。
- ・外資系企業について、実力主義は魅力的ですが、私はコミュニケーション能力に自信がないので難しいかもしれないと思いました。必要とされる力だと思うので、普段の生活の中で磨いていきたいと思います。



◇ F会場 安江 正基先生（辻巻総合法律事務所 弁護士）の講義です！

日時：平成30年2月8日（火）6・7限

参加者：生徒37名

講師：安江 正基氏（弁護士）辻巻総合法律事務所

安江先生は岐阜県立加茂高校理数科出身で、高校時代は吹奏楽部に所属していました。当時は唯一の男子部員だったこともあり、吹奏楽部部长に抜擢され部員をまとめていくのがとても大変だったということです。平成13年に東京大学理科二類に入学しましたが、三年次に文転し法学部に進学されました。大学卒業後は同大法科大学院に進学し、卒業後司法試験を経て弁護士になりました。東京での大学生活は岐阜県人会の寮で生活をされ、他大学の学生達と生活を共にする中で、様々な価値観を学ぶことができたこと、その経験を通して人と関わる弁護士という職業に興味を持たれたと話されました。また、これまでの刑事事件・民事裁判等に携わる中で、様々な人生観を学ぶことができ、弁護することの大



変さ・人と関わる喜びから、働くということの意義を話して下さいました。「どんな職業でも世の中の役に立っていると思う。そうだとしたら、自分はどのような方法で役に立ちたいかをこれからじっくりと考えて欲しい。関高校で学んでいる授業、例えば数学からは論理的思考力を、世界史からは遠い昔の人の知恵を学ぶことができる。全ては、今後の人生の役に立ちます。頑張ってください。」とエールを送って下さいました。

【生徒の感想】

*弁護士の方の話はなかなか聞けないので、聞いて良かった。自分の考えていない分野だったが、今回の話を聞いて、将来の職業として考えて見ようと思いました。

*安江先生は加茂高校出身ということで、親近感が沸いた。弁護士の仕事が自分の思っていたもの以外のことも多くあって面白いと思った。

*実話や例を使って話して頂いたので、理解しやすかったです。学校で学ぶことは将来役に立つことがあると分かったので、しっかりと勉強していきたいです。



◇G会場 櫻井智子先生（大阪市東淀川区役所保健福祉課生活支援担当）の講義です！

日時：平成30年2月8日（火）6・7限

参加者：生徒 6限38名 7限37名

講師：大阪市東淀川区役所保健福祉課生活支援担当 櫻井智子氏



生活保護のケースワーカーになるまでを、大学入試までさかのぼって話して下さいました。

【センター試験が上手くいかず第二志望の大学へ入学。介護実習で自分が高齢者福祉には向かないと感じ、大学へ来た目的を見失う。その後様々なアルバイトやボランティアに参加し、薬物依存についての研究に関心を持ち、卒論のため、福井刑務所に一年半通う。大阪市に福祉専門職の採用があると知り、市職員として採用され、生活支援担当として今日に至る。】

家庭状況の困難さのために薬物中毒に陥ったMさんと信頼関係を結ぶのに、一年かかった話、貧困のために十分な学習が受けられず、「中学生勉強会」で救われた女子中学生カナさんの話、関わっていたアルコール依存症の男性が孤独死してしまった話を語ってくださり、生徒は真剣に耳を傾けていました。

「知らないこと」が偏見を生む、だから「正しく知ること」が重要である、ということの重みが、きっと生徒諸君の心にも届いたと思います。



【生徒の感想】

- ・二つの事例を聞いて、いろんな事情の人がいて、その人たちの生活を支えるために動く、とても興味のある仕事でした。介護ヘルパーを目指していたところから、ケースワーカーの仕事に就くまでの流れもよくわかりました。とても印象に残って、この講座を選択してよかったです。
- ・福祉を軽く見すぎていた。知ることができてよかった。自分の全く知らない、縁のないような人生を歩んで生きている人がいることがわかった。少しでもそのような人たちが暮らしやすくなる手伝いをしてみたい。できるかわからないけれど。
- ・リアルな生活保護の話聞いて、本当に自分自身の幸せを感じました。同時に話を聞く中で、Mさんやカナさんに頑張ってもらいたいと思いました。ケースワーカーという仕事は辛いこともあるけれど、カナさんのような人から力や希望をもらえるから、頑張れるのかなとも思いました。私も、人を助けられるような人になりたいと、心から思いました。

◇ H会場 中西 裕子先生（株式会社 資生堂 研究推進部）の講義です！

日 時： 平成30年2月8日（木）6・7限

参加者： 生徒 70名

講 師： 株式会社 資生堂 研究推進部 中西 裕子氏

資生堂と聞いてまず連想するのは、CMで見かける真っ赤な口紅、きれいなパレットに入った化粧品の数々。そうした化粧品を提供しているだけでなく、中西先生のお話からは、美しさを通じて資生堂製品を手にとった人を幸せにする熱意が感じられました。

現在所属されている部署では、化粧品の開発よりも国内外問わず、様々な世代の女性が求める化粧品から、心の動きそして、民族間の文化の違いや歴史まで考えを深めて一つ一つの製品開発に向き合っているそうです。

そのような背景から、国によって「美人の定義」が違っていると聞いて、生徒からは思わず驚きの声。ご自身が高校時代に感じていた「私とは何者か？」という客観的な視点は、勉強の壁に今の仕事に通じているということから、これから進路選択を迎える生徒たちに改めて自分自身について考えさせる貴重な空間を作ってくださいました。

【生徒の感想】

- 資生堂製品を使っているので、会社の人たちが安全面などを研究していることが十分にわかったのでこれからは使いたいと思ったし、海外の文化は面白いと思った。
- 考えは人によって違って、日本では当たり前と思われていても海外では違うこの差に興味を持った。
- 化粧品会社だから化粧品だけ、というわけではなく様々な考え方などが集まって、ひとつの団体として物を作っているということが分かった。
- 「美」という答えのないものを考える、興味深い！
- 新しい価値観に触れると自分を客観的に見る機会になる。
- CMで見ると大きな会社は、日本人同士でも英語で会話！英語がやっぱり必要なんだと悲しいような気が引き締まるような、複雑です。

